

〔源氏物語夕顔〕六條わたりの御忍びありきの比、うちよりまかで給なかやどりに、大貳のめのといたくわづらひて、あまに成にけるとぶらはんとて、五でうなるいへたづねておはしたり。○中さきもをせ給はず、誰とかしらんとうちとけ給て、すこしさしのぞき給へれば、かどはしとみのやうなるをしあげたるみいれの程なく、ものはかなきすまゐを、哀にいづこかさしてとおもほしなせば、玉のうてなもおなじことなり、きりかけだつ物に、いとあをやかなるかづらの、こちよげにはひかゝれるに、しろき花ぞをのれひとり、忍みのまゆひらけたる、をちかた人に物申とひとりごちたまふを、御隨身ついで、かのしろくさけるをなん夕がほと申侍る、花の名はひとめきて、かうあやしきかきねになんさき侍けると申げにいと小家がちに、むづかしげなるわたり、このもかのもあやしう打よるぼひて、むねくしからぬのきのつまなどには、ひまつはれるを、口おしの花のちぎりや、ひとふきおりてまいれとの給へば、このをしあけたる門に入ておる、さすがにされたるやり戸口に、きなるすゞしのひとへば、かまながくきなしたるわらはの、おかしげなる出きて、うちまねく、しろき扇のいたうこがしたるを、こねにをきてまいらせよ、枝もなさけなげなめる花をととらせたれば、かどあけて、惟光の朝臣のいできたるして、たてまつらす。○中略 修法など又々はじむべきことなど、をきての給はせて、出給とて、これみつにしそくめして、ありつる扇御らんずれば、もてならしたるうつり香いと、しみふかうなつかしうて、おかしうすさびかきたり。

心あてにそれかとぞみる白露の光そへたる夕がほの花

〔徒然草上〕六月の比、あやしき家に、夕顔のしろくみえて、かやり火ふすぶるもあはれなり、

〔六百番歌合夏〕十二番 夕顔 右勝

中宮権大夫

折てこそみるべかりけれ夕露にひもとく花の光ありとは